■エトワールがバトルファックでイカされまくる話

――バトルファック！
それはプライドを懸けて性の技を繰り広げ合う競技である！
今宵も地下の会場で数々の淫闘が繰り広げられているが……
その中でも一際強さと美貌を目立たせる選手がいた！

「またビクビクしてる♪　わたしのマンコにぶち込むんじゃなかったの？
まさかもう終わりじゃないよねぇ♪」
【うぅっ！　く、くそっ、離せぇ……】
ぶるんっ♥♥
【ぅあぁっ！】
ドクッ♥♥　ドプププッ♥♥
「はい、おしまい♥　大口叩いた割に、呆気なかったね♥」
『挑戦者、パイズリに耐えられず大量射精！　そして精力が尽き試合終了――！　凄まじい射精ＫＯ！
勝利したのは、やはりキュアエトワーール！！』

変身ヒロインじみた衣装に身を包み、爆乳で巨根を果てさせた女選手、キュアエトワール。
彼女はデビューしたての新人なのだが、その美貌とテクニックで凄まじい人気を博し、
現在のＢＦ協会のスター的存在となっていた。

『さぁ敗者へのペナルテイタイム！
無惨に散った挑戦者のペニスを、エトワールがムリヤリ扱き立てるっ！』
【も、もうやめ……**あぁぁぁっ！**】
「ほら、もっとよ♥　気合入れて勃ちなさいっ♥」

今試合も圧倒的な実力差で１ラウンドＫＯをしてみせたエトワール。挑戦者も相当な性豪の筈なのだが……
彼女との勝負となれば相手が悪いとしか言いようがなかった。
決着後に勝者が敗者を甚振ることができるペナルティタイムに入り、
エトワールは強壮剤を相手の少年に飲ませると、更にパイズリを続けて強制的に勃起させ、
限界以上に性欲を搾り取っていく。

【ぁ……あぁ……っ！】
ドビュッ♥♥　ビュルル……ッ♥♥
「ふん、もう終わりか……ま、わたしにかかればこんなものね」
『圧倒的！　今回も挿入すらさせず勝利したエトワール！　伝説の女王、輝木ほまれを髣髴とさせる強さだ！
彼女に初黒星を付けるのは一体誰になるのか――？！』

つまらなそうにするエトワールを司会が讃えつつ、元チャンピオンの輝木ほまれと比較する。

ほまれとは、将来を期待されていた元フィギュアスケーターだ。
怪我で引退したことをきっかけに非行＝淫闘に励むようになったのだが……
ルックスとテクニックで、デビューから無敗のまま勝ち続け、
しかし突如　謎の引退を経てリングから姿を消した伝説の女王だ。
その数ヶ月後、現れたのがエトワール。
エトワールはほまれと酷似したスタイル、テクニックで
デビュー間もなくランキングトップになったのだが……

「はぁ……やっぱりバトルファックはやめられないね……♥」

何を隠そう、エトワールの正体はその輝木ほまれその人である。
正義の戦士・プリキュアとなってから、なんとか真面目に生きようとバトルファックを引退したほまれ。
しかし生来持つ強い性欲に抗えず、正体を隠したプリキュア変身状態で再び参戦。
似ている点は『ほまれリスペクト』『似て非なる容姿』として受け入れられ、
実際に膣内の感触も違うようで、プリキュアに変身したために筋力が上がって締まりは更に増しているため
以前戦った少年たちからも別人扱いを受けていた。

こうして『キュアエトワール』というリングネームで舞い戻ったほまれ。
正体がバレるかどうかのスリル、正体を隠していることで生まれる変身願望に似た感覚も手伝い、
ほまれ……否、エトワールは更に淫闘に没頭していた。

そんなエトワールに、ある日　大きなイベントの参加依頼が届く。
今までより大きな会場を使い、より多い観客を呼んでの試合を開催するらしい。
ＢＦ協会としてはなんとか成功させたいとして、スターであるエトワールに出場依頼が来たのだ。

「ふぅん……大勢の前でチンポをいたぶれるってことね。イケてんじゃん♪」

期待されていること、そしてイメージの中にあるのは、もちろん少年相手に完勝するエトワールの姿。
嗜虐欲を煽られ、舌舐めずりと共に了承のメールを返すのだった……

◆
試合当日。
休憩中、エトワールは控室で携帯端末を使い、暇潰しにネットサーフィンしていると、
アングラサイトにてある噂を目にする。

（これ……また、わたしのことじゃん）

ＢＦ関連サイトでは、今もエトワールの正体は輝木ほまれではないか、という噂が後を絶たない。
どれだけ対戦相手が否定しようと、やはり噂や推測はされる。
中には過激な者が『特定してやる』と言った書き込みをしていることもあり……
そう言った発言から正体を見破られることを想像し、エトワールは思わず秘部を濡らしてしまう。

（負けたらわたし、どうなっちゃうんだろ……♥　色んなヤツらから恨み買ってるだろうしなぁ……♥）

　エトワール自身は相当なサディストである。だがＢＦファイターである以上は性戯を受けることもあり、どうしてもマゾっ気も開発されてしまう。
　試合では得られない、追い詰められる感覚。それに対し、下手な試合以上に興奮してしまっているのだ。

（おっといけない、そろそろ時間か）

　携帯端末をオフにしてリングに向かう。
　すっかり有名になったようで、噴煙やライトなど派手な演出がなされ、リングに上がるまでも大勢から歓声をかけられる。
　リング上では既に挑戦者の少年が待ち構えていた。司会によれば逸材とのことだが、
　残念ながら『輝木ほまれ』時代に試合し、そして圧倒したことのある相手だ。
　『ほまれにリベンジするため』にかなり鍛えたようで、その怒りと実力をエトワールにぶつけるつもりなのだろう。

『赤コーナー、言わずと知れたキュアエトワール！
　対する挑戦者は稀に見る逸材、あの輝木ほまれ以外には負け知らずの性豪！
　さぁエトワールに黒星は付けられるのか？　両者向き合い――』
（またこいつか……まぁ手こずった方だし、強くなってるなら少しは愉しめるかな……♪）

　勝つのは大前提だが、今や圧倒的すぎるため、相手が強くなければ退屈してしまう。
　せいぜい粘り、自分と観客を盛り上げてくれたら、と余裕がゆえの願望を抱き、エトワールは試合に臨む。

『試合開始！！』

　ゴングが鳴り、同時に少年がタックルを仕掛ける。押し倒し、マウントを取って責めるつもりだろう。

（させないよ！）

　対し、エトワールはローキックに近い所作の足さばきで応じる。金的蹴り、足コキも狙える動きだが、足払いとしても機能する。
　手加減はしているが、やはりプリキュアとなれば身体能力が常人以上。
　素早いはずの少年の動きにもあっさり対応でき、転がすことに成功する。

「悪いね、まず一発いくよ！」
『挑戦者タックル……しかし転ばされる！　そこにエトワールが両脚を掴み……電気アンマ――！！』
　ガガガガガガッ♥♥
【っっ！　あぁぁぁぁっ！】

　足を激しく震動させ、股間部を足裏で刺激する。傍から見れば子供の遊びだが、
　性感に目覚めた者に対して使えば相当な威力を発揮する立派な性戯となる。

無論エトワールが行えばただの性戯に留まらない。
蟻の門渡り、睾丸、そして肉棒を激しくも柔らかく刺激し、たちまち少年の性感を上昇させる。
器用なことにショーツ状のコスチュームを脱がして勃起を露出させると、
直に亀頭裏を踏み抜いて一際強く扱き上げる。
少年は逸材と言われるだけはある巨根が勃起して更に絶倫さを垣間見せるものの、
やはり踏まれたまま反撃はできず……

「そろそろね……３、２、１……」
【つく！　ぅぅ……っ！】
　ビュルッ♥♥　ドビュビュビュッ♥♥
「はい、いっちょあがり♪」
『巨大なペニスだが、あっという間に勃起させられ……
試合開始から早々、早くも電気アンマ足コキで射精――！　やはりエトワール、圧倒的すぎる！』

大量の精液が溢れ、極上テクニックと無様な絶頂に司会と観客のテンションが一気に沸き上がる。
絶対的な実力差に盛り上がる周囲だが、エトワール自身は相手を見下ろしつつも内心で評価していた。

（前は即堕ちだったのに、案外粘るじゃん♪　前よりデカくなってるし……）
「……あっ！」
『しかし試合はまだ終わってません、挑戦者の精力は余裕がある！
脚を掴んでエトワールを転がしグラウンド展開に持ち込んだ！』

十秒程度とはいえ、射精を持ち堪えることができた少年。しかもペニスのサイズは以前よりも増している。
それに対し感心していると、足コキしていた脚を掴まれて転がされてしまう。
油断で生じた一瞬の隙が、バトルファックでは命取りになる。
危うく覆い被さられるところだったが、エトワールは素早く切り替えしてパイズリを決めることに成功する。

『油断したかエトワール？！　マウントを取られそうになる……が！　ここで切り替えし！　逆にパイズリを決めていく――！』
「ふふ、油断したよ……中々ヤるじゃん♪　でも、そう簡単にはヤラれないからっ♪」
　ぐにゅんっ♥　たぷっ♥　ぶるんっ♥
「ほらほらっ♪　この爆乳パイズリで、遠慮なくイッちゃいなっ♪」

ただでさえ大きかった巨乳が、変身したことで発育し爆乳となっているエトワールのバスト。
そのボリュームもさながら、ハリと弾力が雄に心地いい刺激を与え、絶倫巨根が再び震える。

「ほら、二発目っ♥」
　ドビュルルルルッ♥♥
【うぅっ！　く、くそっ……！】
『二発目、パイズリで乳内射精――！　一度捕らえたら離さない極上の責め！
これはまたエトワールの圧倒か――？』

（はぁ……♥　思ったより……♥　匂い……スゴ……♥
それに……熱い……♥　胸……灼ける……っ♥）

いつものようにあっさりと射精させ続け、誰もが決着を確信する。
だがエトワールは、想像を超える精液の量、濃度、そして匂いと熱さに
意識がぼんやりとしてしまう。

『……っと、どうしたエトワール？　恍惚としている隙に抜け出されバックを取られた！』
「え？！　しまった……！」

またも油断し、相手に抵抗を許してしまう。
油断しているだけでなく、どこか動きも鈍く感じられ……
気付けば後ろから組み付かれ、下着の中に滑り込んだ手で陰部を責められていた。

（何？　身体が、上手く動かな――）
ぐちゅぅぅっ♥
「んはっ♥　あぁぁんっ♥」
『ここで挑戦者が初めて責める！　密かに濡れていたエトワール、珍しくダメージを受けている！』
「ち、違っ、これは……っ♥　あ♥　あぁぁっ♥」

既に濡れそぼっていたエトワールの秘部。だがそれは少年の責めが巧みなだけでなく、
試合前にネットの噂や書き込みを見て興奮したことがまだ尾を引いている、というのもあった。
恨みを買っている分、負ければ惨たらしいまでの辱めを受けるのではないか――
その期待感がじんわりと響いており、以前勝利した者が相手というのもあり無自覚に昂ぶっていたのだ。
圧倒的強者かつサディストゆえ、責められることに興味を抱いてしまい、
牝らしい被虐を意識した身体が発情。動きも鈍くなって反撃を許してしまったのだ。

【イケイケな感じだったけど……なんだ、エトワールも濡れてたんだ。精液浴びて期待しちゃった？】
「なっ……そんなわけないでしょっ！　あ♥　やめ……」
ぐちゅぐちゅぐちゅぅっ♥
「あ♥♥　んんぅぅっ♥♥」
『大量の愛液が出るが……絶頂センサーは反応せず！
しかしこれほどエトワールが濡れるのは久々だ！　逆転があるのか――？！』

責められる前から強い興奮状態に陥っていたエトワール。
激しい手マンで思いがけず大きな快感ダメージを受け、危うく絶頂しかけてしまう。

（ウソ、こんなに濡れてたの……？♥　このままじゃヤバいっ♥）
ぐちゅ♥　ぬちゅぅ……っ♥
【いくらなんでも濡れすぎでしょ。イキたいなら遠慮なくイッちゃえよっ！】
「ちょ……調子に、乗らないで……っ♥♥　この程度の責めじゃ、イキたくてもイケないわ！」

【ふぅん……なら乳首も一緒にいじってあげるよ！】
　くりっ♥　ぎゅむぅぅっ♥
「んひっ♥♥　ちょっ、やめ♥♥　あぁぁっ♥♥」

　エトワールは責めるテクだけでなく快楽への耐性にも自信がある。
　とはいえ、既に性欲のスイッチが入っていれば何の意味もない。
　普段ならば涼しい顔で耐えられる同時責めが、いよいよ官能を押し上げ――

『どうしたエトワール、いつもの頑丈さはどこへいった？！　これは本当に絶頂してしまうのか！』
【乳首もクリもビンビンだよ？　我慢しないで……そらっイケぇっ！】
　くりくりくりくりっ♥　びんっ♥　ぎゅりぃぃっ♥♥
「やめっ♥♥　あ♥♥　ダメ♥♥　あぁぁぁぁぁっ♥♥♥」
『絶頂――――！！　難攻不落と化していたエトワールの防御力が、ついに崩された――！
　久々の絶頂姿に会場は凄まじい盛り上がりだ――！！』
「違っ♥♥♥　今のは♥♥♥　あぁ……っっ♥♥♥」

　否定しても漏れる嬌声と愛液、そして絶頂センサーの反応がエトワールのアクメを証拠づけている。
　過去に行った、敢えて責めさせるハンディキャップマッチ。
　それ以来の、ハンデ戦を除けば初となる実践での絶頂に、
　ファンもアンチも強い熱気を視線としてぶつけてくる。

【あーあ、イッちゃった……どうする？　ギブアップするなら今の内だよ？】
「くふぅっ……♥♥　い、一度イカせただけで……いい気にならないでっ！」

　相手を引き剥がし、素早く振り返って屈みこむと巨根を咥える。

「アンタこそ、降参するなら今の内よ♥　んぶっ♥　じゅぶぅぅっ♥♥」
『絶頂したエトワール、しかしまだ続行可能！　フェラで反撃に出る！』
【っ、イッたくせに生意気だね……ならもっと思いっきりしゃぶってもらおうかな！】
　ずぼぉぉっ♥
「んぐぅぅっ♥♥」
『しかし挑戦者もイラマチオで対抗！　これはどちらのダメージが大きいのか？！』

　舌で肉竿を絡め捕り、確かに性感を与えて追い詰める。
　だが頭を掴まれ、喉奥まで抉られてエトワールも興奮してしまう。
　主導権を取られては思うように責められず、口内を犯される刺激で
　また官能が高まっていく。

【ほらほらどうしたの、全然舌使いがなってないんだけど？　もしかして喉でもイッちゃうのかな？】
　じゅぼっ♥　ずぶっ♥　じゅぶぶぶっ♥

「んぐっ♥♥　んっぷ♥♥　んぐぅぅっ♥♥」
（こ、こんなはずじゃ♥♥　フェラでこんなに感じるなんて……♥♥
　ヤバいっ、本格的に立て直さないとっ♥♥）
「んぷぁっ♥♥」

　このままではまた絶頂しかねない。蕩けた貌を左右に振ることで巨根から離れ、距離を置いて態勢を立て直そうとする。
　だが少年はエトワールが半アヘであることに気付いており、素早く後ろに回って抱え込む。

【遅いっ！】
「ひぁっ♥♥」
『エトワールまたバックを取られた！　騎乗位のポジションになり――』
（何でっ♥♥　身体が♥♥　動かな……あ♥♥　ちんぽがっ♥♥）